

音象徴からみる言葉の身体性

Embodiment in Sound Symbolism

篠原和子*¹
Kazuko Shinohara

川原繁人*²
Shigeto Kawahara

*¹ 東京農工大学
Tokyo University of Agriculture & Technology

*² 慶応大学
Keio University

1. はじめに

本研究は、音象徴の分析を通して、言葉の基本要素である語彙に内在する身体性を考察する。ソシユールによれば、言語記号の音声面と意味的な面は、恣意的に結びついており、身体性などの動機づけはないとされるが、言語音が特定のイメージを引き起こす現象(音象徴)は、これに反し、語彙の音声面と意味側面の結びつき方にも身体性が動機づけとして関与している(多くの語彙においてこの結びつきは恣意的であることは否定されないが)。この音象徴現象は、言語学や心理学で実験的データや調査サンプルによって検証され、動機づけが議論されてきたが、主として形・大きさ・動き・色といった、視覚的・触覚的把握可能なイメージに関するものが多かった(たとえば、母音[a]が「大きい」イメージ、[i]が小さいイメージに結びつくこと(Sapir 1929)や、無声破裂音[p, t, k]が直線的で鋭角的な図形と結びつくのに対して共鳴音[m, n, r, l]は曲線的で丸みのある図形と結びつくこと(Köhler 1929/1947)など)。

本研究では、視覚的・触覚的には捉えにくい人間のパーソナリティのイメージについても音象徴現象が起きることを実験的に検証し、その動機づけとして音声学的説明が与えられることを示して、身体性と音象徴の関連を考察する。阻害音と共鳴音を対象とし、人の名前において阻害音がよりクールで冷たく近寄りたたいパーソナリティのイメージを喚起するのに対し、共鳴音がより優しく穏やかで近寄りやすいパーソナリティのイメージを喚起することを検証した。我々の先行研究(Shinohara and Kawahara 2012)では、日本語話者についてこれらのイメージ喚起が起きることを確認していたが、本研究で英語話者についても調査した結果、同じ現象がみられることから、この音象徴現象は言語を越えて存在することが示唆される。これらの音とイメージのつながりは、音響音声学的側面から説明を与えることが可能であり、人間が音声の性質を感じ取る感覚によって引き起こされていると考えることができる。このことから、言葉の音と意味との関係は完全に恣意的なものではなく、身体的動機づけによって結びついている側面もあることがわかる。

2. 先行研究

2.1 名前にみられる音象徴

Berlin (2006)は、実在する南米の言語で動物名を調査し、阻害音が、細身で鋭角的な身体をもち素早く動く動物の名前に多く見られるのに対し、共鳴音は、太めで丸みをもった身体をもち、動きの遅い動物の名前に多く見られる、ということを示した。そし

てこれは阻害音・共鳴音の音響的特性と関連があると論じている。また男女の名前について、阻害音は男性の名前に多く、共鳴音は女性の名前に多く含まれる、あるいは連想されやすいという報告が、日本語についても(上村 1965)英語についても(Cassidy et al. 1999, Slater & Feinman 1985, Wright et al. 2005)なされている。さらに、我々が行った最近の日本語男女名についての予備調査(2011年人気の男女名ベスト50, 明治安田生命調べのデータをもとにした。(明治安田生命 2011))では、名前に含まれる阻害音・共鳴音の分布に男女で有意な偏りがあり、男子名に阻害音が多く、女子名に共鳴音が多かった(Chi-square test: $p < .001$)。

2.2 メイドの名前: 萌え系とツン系

Shinohara and Kawahara (2012)は、以上のような先行研究の知見をもとに、阻害音/共鳴音がそれぞれ男性的・女性的というイメージを喚起しやすいらしいという点を拡張し、「メイド」(秋葉原に2001年から出現した喫茶店の一種で働くウェイトレス)の名前という想定で無意味語を用いて名前音のイメージを実験的に調べた。より女性的で柔らかいイメージのメイド(仮に「萌え系」と呼ぶ)と、よりクールで冷たい態度をとるイメージのメイド(仮に「ツン系」と呼ぶ)を想定の上、それぞれに相応しい名前を選ばせた結果、阻害音を含む名前はツン系、共鳴音を含む名前は萌え系と判断される傾向が有意であった(被験者として(1)実際にメイドとして働いている女性、(2)都内の大学生、の2グループで別個に実験したが、両方で有意であった)。

3. 実験

本研究では人物のパーソナリティのイメージと言語音の関係を、英語話者について調べた。「阻害音はクールで冷たく近寄りにくいパーソナリティの人を連想させ、共鳴音は優しくソフトで近寄りやすいパーソナリティの人を連想させる」という予測に基づき、これを検証した。ただし特にメイドという設定にせず、女性の名前とパーソナリティのイメージをマッチングさせる方法をとった。

3.1 方法

強制選択式の質問紙によりウェブ上で実験を行った。刺激は10組のCVCVCV形式の3音節からなる無意味語で、各組の語の母音は同一組み合わせとし、子音のみ異なる。各ペアの1語は阻害音[t, s, k], もう1語は共鳴音[m, n, r, y, w]を含む(例: [tesoka] vs. [meyona])。44名の英語母語話者が参加し、ペアの名前についてどちらが冷たくクールで近寄りにくいタイプでどちらが優しく柔らかく近寄りやすいタイプの女性の名前だと感じるかを、2つの選択肢から選んだ。10問の問いは被験者ごとにランダム化した。10組の名前は以下の通りである。

Sataka / Wamana Setaka / Meyana
Sateka / Ramena Sotaka / Yomana

Setoka / Reyona Tesoka / Meyona
 Tasoka / Wamona Tesuka / Reyuna
 Tosoka / Yomona Teseka / Merena

被験者は設定を呈示する文章を読み、理解したあと、練習問題を1問行って回答の仕方を理解したうえで10問の問いに答えた。設定では、スピルバーグ監督が新しい映画で地球外天体の知的生物の言語についてサンプルを作ろうとしている、という状況を想定し、被験者はその助手としてサンプル作りに協力してほしい、とした。この言語では女性の名前がパーソナリティを表すようになっており、この情報が映画のストーリー上重要である、として、どの名前をどのパーソナリティと結びつけるのがよいかを答えてもらった。

【指示】 In each of the following pages, you will see two names. Please read them aloud in your head, and guess the type of personality of the person with the name. Please do not rely your judgment on orthography; please instead try to use your auditory impression as much as possible.

One of the two names is for a cross, inaccessible, blunt type of person; the other is for an amiable, accessible, soft type of person. (These personality types will be indicated as just "cross" type and "amiable" type.) Your task is to decide which name should be the cross type and which should be the amiable type.

【設問例】

Read the following names to yourself.

Sateka, Ramena

Choose one of the following options.

1. Sateka is for "cross" type and Ramena is for "amiable" type.

2. Ramena is for "cross" type and Sateka is for "amiable" type.

回答はウェブ上の選択肢をクリックすることによって行われた。各問いは1ページに1問ずつ呈示され、回答がなされると次の設問に移るよう設定された。最後に被験者はジェンダー、年齢、母語、居住地(国名)、音象徴について学んだか又は研究をしているか、の問いに答えた。実験ウェブサイトは surveymonkey によって作成し、被験者は John H. Krantz の Psychology research on the net のサイトを通じて募集された。

回答のうち、英語母語話者でないもの、英語圏(アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド)以外の国に在住の者を除き、44名からのデータを得た。統計は Wilcoxon test を用いた。

3.2 結果

分析の結果、英語話者は、障害音を含む無意味語の名前を“cross, inaccessible, blunt type”の人、共鳴音を含む無意味語の名前を“amiable, accessible, soft type”の人と判断する傾向が有意にみられた ($p(c)=0.79$, $p<.001$; $d'=1.16$, $p<.001$)。この結果は予測を支持する。

4. 考察

4.1 音声学的動機づけ

この結果は、先行研究で得られた日本語話者による実験結果と符合し、共鳴音(本実験では [m, n, r, y, w]) がより優しくソフトなパーソナリティのイメージを喚起し、障害音(本実験では [t, s, k]) がより冷たく不機嫌なパーソナリティのイメージを喚起する傾向がみられた。この音象徴的イメージ喚起には、音声学的動機づけが考えられる。障害音はその発生時に強いエネルギー変化を伴い、波形が鋭く変化するのに対し、共鳴音はゆるやかなエネルギー変化を伴い、母音への移行も明確な境界を持た

ない。障害音にみられる急激なエネルギー変化が、突然の気分の変化や性格的な鋭さといったイメージと親和性をもつように感じられるのであろうと推測できる。これは、Köhler による障害音/共鳴音と鋭角的図形/丸みのある図形の対応という実験結果の動機づけとして Berlin が行った考察と同様である。我々はすでに、知覚可能なイメージ(形、大きさ、動き、色など)以外にこの種の説明が適用できるとされる象徴的関連を、「感情」について調べ、エネルギー変化の急激さによって「音」「形」「感情」の結びつきが説明できることを論じたが (Kawahara and Shinohara 2012)、パーソナリティについてもこれと同様の説明が可能と思われる。

4.2 言葉と知の身体性

本研究では、音象徴の事例研究を通して、言葉の基本的要素である語彙そのものに身体性との関連がみられることを考察した。人間の言葉の大きな特性として、音と意味が距離をもち、「今ここ」での環界への身体的相即とは切り離れて記号として浮遊するという性質が、ソシュール以来の構造主義的言語学においては前提とされてきた。しかし近年、認知言語学や認知科学、神経科学、工学等に広がりを見せている音象徴の研究(たとえば篠原・宇野(編)2013 参照)を通じて、言葉にみられる身体性が関心を集めている。知の身体性を論じるにあたり、言葉がどのように身体的基盤をもつかについての考察は、避けて通れない。ことに記号のもつ身体性と浮遊性は、今後の研究の発展が待たれる。

参考文献

- [Sapir 1929] Sapir, E.: A study in phonetic symbolism, *Journal of Experimental Psychology* 12: 225–239, 1929.
- [Köhler 1929/1947] Köhler, W.: *Gestalt psychology*. New York: Liveright.
- [Shinohara and Kawahara 2012] Shinohara, K. and Kawahara, S.: The sound symbolic nature of Japanese maid names, Paper presented at The 13th Japanese Cognitive Linguistics Conference, 2012.
- [Berlin 2006] Berlin, B.: The first congress of ethnozoological nomenclature, *Journal of Royal Anthropological Institution* 12: 23–44, 2006.
- [上村 1965] 上村幸雄: 音声の表象性について, *言語生活*: 66-70, 1965.
- [Cassidy et al. 1999] Cassidy, K. W., Kelly, M. H., and Sharoni, L. J.: Inferring gender from name phonology, *Journal of Experimental Psychology: General* 128: 362–381, 1999.
- [Slater & Feinman 1985] Slater, A. S. and Feinman, S.: Gender and the phonology of North American first names. *Sex Roles* 13: 429–440, 1985.
- [Wright et al. 2005] Wright, S., Hay, J. and Tessa, B.: Ladies first? phonology, frequency, and the naming conspiracy. *Linguistics* 43 (3): 531–561, 2005.
- [明治安田生命 2001] 明治安田生命: 名前ランキング 2011 名前の読み方ベスト 50, <http://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking2011/read_best50/>.
- [Kawahara and Shinohara 2012] Kawahara, S. and Shinohara, K.: A tripartite transmodal relationship among sounds, shapes, and emotions, Paper presented at The 34th Annual Conference of the Cognitive Science Society, 2012.
- [篠原・宇野(編) 2013] 篠原和子・宇野良子(編): 『オノマトペ 研究の射程: 近づく音と意味』つじ書房, 2013.